

神奈川における

視覚障害者レクリエーションの展開（４）

—— 視覚障害者のスキー、ブラインドスキー ——

- 増田 良一（神奈川県視覚障害援助赤十字奉仕団）
- 間嶋 和子（神奈川県視覚障害援助赤十字奉仕団）
- 末田 靖則（神奈川県総合リハビリテーションセンター七沢ライトホーム）
- 渡辺 文治（神奈川県総合リハビリテーションセンター七沢ライトホーム）

キーワード：視覚障害、レクリエーション、スポーツ、スキー、誘導

1. はじめに

視覚障害者はどうしても運動不足となりやすく、特に冬場はその傾向が顕著となり、それを解消する手だてはなかなか見つけにくいのが現状である。多くの暗眼者はウインタースポーツとしてスキーを楽しんでいる。視覚障害者にもスキーができないものかとの要望を受け、全く手探りの状態で視覚障害者のスキー、ブラインドスキーを開始した。視覚障害者は何故スキーができないのか。滑るための情報が得られないためである。それではどうすれば必要な情報を得ることができるのか。パートナーが必要な情報を伝える役割を果たせばよい。このような試行錯誤を重ね、16年にわたり実践してきたブラインドスキーの概要を報告する。

2. ブラインドスキーとは

ブラインドスキーといっても滑り方に大きな違いがあるわけではない。見えない、あるいは見えにくいためにグレンダの状態（コース、方向、斜度、コブ、障害物、他のスキーヤー、雪の状態等）がよくわからないブラインドスキーヤー（以下、BSと略す）にパートナーが必要な情報を伝えることで、一般のスキーヤーと同様に滑ることができるのである。ここでは、ブラインドスキー実施に際して欠かすことのできないスキー誘導法を中心に紹介する。

(1) ある程度滑れる場合

- ・パートナーはBSの斜め後方2～3mで周りが十分見渡せる位置につく。
- ・一緒に滑る時の声掛けは「右」「左」「ストップ」といった簡潔な言葉を使う。
- ・パートナーの声掛けが途切れるとBSは不安になるので「そのまま」「いいよ」等の声を絶えずかけ続ける。

(2) 初心者への導入の場合

- ・実際にやってみせることでの説明ができにくく、また、滑走場面では実際に触って確認することも難しいため言葉による説明が中心となる。
- ・個人差(障害の程度、受障時期、経験等)が大きいことを認識し、ある場面、ある人にうまくいったからといって別の場面、別の人でうまくいくとは限らない。
- ・ある程度見える場合は問題が複雑になり、どの程度周りが認識できているのかわかりにくく、わかっているつもりで行動し危険な状態となる場合もある。
- ・言葉による説明に加え触れることができる場合は実際に触って説明する。
- ・見えない状態では不安感も強いので過剰と思えるくらい声を出し続ける。指示がな

ければ不安感が強まり恐怖心を持ってしまう。

以上のことに注意しながら技術的には晴眼者に教える場合と同様の段階をたどるが、より細かい練習段階を設定する。

(3) その他

- ・他のスキーヤーに視覚障害者であるということが明確にわかるようなゼッケンをつける。
- ・滑り込む目標地点でホイッスルを鳴らすことによりBSが滑る目安となると共に、他のスキーヤーに注意を喚起することができる。
- ・上級者になるとスピードがあり、パートナーが至近距離で滑ることが難しくなったり、また、大声を出さずにすむようにFM無線を利用して指示することもある。

3. 現状と経過

神奈川県内では毎年、視覚障害援助赤十字奉仕団が主催しているブラインドスキーのアルペン、クロスカントリーを各1回、神奈川県視覚障害者スキー協会（以下、スキー協会と略す）が実施しているアルペンスキーが2回、その他の団体（盲学校単位等）でも実施している。神奈川の視覚障害者は、雪無し県に在住しているにもかかわらず、スキーを楽しむ機会は他県に比べ多いものと思われる。表1にこれまで行ってきたブラインドスキーツアーについて、表2にスキー協会主催のツアーについてに示した。ブラインドスキーツアーは16年間にわたり毎年実施され、延べ747名（視覚障害者248名、晴眼者499名）が参加している。スキー協会が実施しているスキーツアーには10年間にわたり、計14回、延べ532名（視覚障害者162名、晴眼者370名）が参加しており、あわせると延べ1279名（視覚障害者410名、晴眼者869名）がアルペンスキーに参加している。クロスカントリースキーの参加者を含めるとおおよそ1500名（視覚障害者500名、晴眼者1000名）がこれまでに参加している。

1980年にとにかくやってみようとして一般の旅行業者が企画したスキーツアーに便乗して始めて以来、2年目にはお座敷スキー（室内で手取り足取りで滑る姿勢を練習する）を導入したり、どうすれば安全で楽しいスキーが楽しめるのかと指導者がアイマスクをつけて滑ってみたり、様々な工夫がなされた。3年目には上達の目安とするための検定の実施、5年目には雪遊び（雪に触れてみたいという人、子供たちの希望を実現）の導入、6年目にはクロスカントリースキーを別ツアーとして開始した。1985年に至って、念願とした当事者団体であるスキー協会が発足し、翌年からスキー協会が主催するスキーツアーが開始され滑る機会が増えた。1992年からは年2回のスキーツアーを主催しており、さらに滑る機会が拡大した。なお、ブラインドスキーは初心者を中心に受け入れ、スキー協会にはある程度滑れる者が参加する等、役割分担がなされている。

スキー協会はブラインドスキー参加者が母体となり「スキー等雪上スポーツを通して視覚障害者の健康及び体力の増進をはかり、視覚障害者と晴眼者との相互理解を向上させる」ことを目的に設立された。スキー協会の活動は視覚障害者自身によるものであり、視覚障害者の意志が直接反映されることに意味があるといえる。会員となる資格は特になく1995年現在で視覚障害者35名、晴眼者101名の計136名の会員を抱える大きな団体となっている。年2回のスキーツアーの他に会員の相互交流やオフシーズンの体力作りを目的に山歩き等、様々な活動を行っている。

表1 ブラインドスキー（アルペン）の概要

回	スキー場	年	視覚障害者			晴眼者			合計			備考
			男	女	計	男	女	計	男	女	計	
1	草津	1980	5	3	8	8	8	16	13	11	24	一般スキーツアーに参加
2	湯沢新日本	1981	11	0	11	13	17	30	24	17	41	お座敷スキー開始
3	湯沢新日本	1982	13	4	17	17	14	31	30	18	48	スキー検定試験的に実施
4	湯沢新日本	1983	13	4	17	15	12	27	28	16	44	スキー検定実施（1～5級）
5	湯沢新日本	1984	10	4	14	12	14	26	22	18	40	雪遊び開始
6	湯沢新日本	1985	10	6	16	18	13	31	28	19	47	検定基準見直し（1～8級） クロスカントリースキー開始
7	湯沢新日本	1986	9	7	16	18	16	34	27	23	50	スキー協会ツアー一年1回開催
8	湯沢パーク	1987	7	11	18	15	20	35	22	31	53	事前説明会開始
9	湯沢パーク	1988	12	7	19	17	19	36	29	26	55	
10	北海道ニセコ	1989	10	7	17	19	11	30	29	18	47	10回記念行事
11	舞子高原後楽園	1990	8	5	13	16	9	25	24	14	38	
12	舞子高原後楽園	1991	14	4	18	23	16	39	37	20	57	
13	舞子高原後楽園	1992	11	7	18	21	11	32	32	18	50	スキー協会ツアー一年2回開催
14	バラギ高原嬉恋	1993	8	6	14	23	11	34	31	17	48	
15	バラギ高原嬉恋	1994	11	5	16	23	11	34	34	16	50	
16	バラギ高原嬉恋	1995	11	5	16	23	16	39	34	21	55	

表2 スキー協会のスキーツアーの概要

回	スキー場	年	視覚障害者			晴眼者			合計			備考
			男	女	計	男	女	計	男	女	計	
1	岩原	1986	5	4	9	11	5	16	16	9	25	
2	石打後楽園	1987	6	4	10	21	2	23	27	6	23	
3	石打後楽園	1988	7	6	13	17	9	26	24	15	39	
4	石打後楽園	1989	10	5	15	21	6	27	31	11	42	
5	丸沼高原	1990	9	5	14	17	4	21	26	9	35	
6	丸沼高原	1991	7	7	14	24	8	32	31	15	46	
7	丸沼高原 エコーバレー	1992	5	10	15	22	9	31	27	19	46	スキーツアーを年2回開催
8	丸沼高原 エコーバレー	1993	8	6	14	20	11	31	28	17	45	
9	エコーバレー 丸沼高原	1994	5	5	10	21	10	31	26	15	41	
10	エコーバレー 丸沼高原	1995	3	4	7	17	12	29	20	16	36	
			6	5	11	19	9	28	25	14	39	
			4	6	10	15	11	26	19	17	36	

4. おわりに

現在の活動で問題となっている点について以下に述べる。

(1) ブラインドスキー

・中心となるスタッフの固定化

開始当初から15年以上経過している中で、参加者や指導者は毎年少しずつ変化してい

るが、2回のツアーを10ヶ月余りかけて企画・実施しているスタッフはほとんど固定したままで後継者の育成ができていない。現在のスタッフでいつまで続けられるのか、また、続けるべきなのかとの迷いを感じている。

・パートナーの確保が難しい

アルペンスキーは経験者も多く協力を得やすいが、クロスカン트리スキーは経験者も少なく、一般的ではないために協力を得にくい。

・視覚障害以外の障害を合わせ持った人の受け入れ

肢体不自由を伴うケースや聴覚障害を伴うケースの参加希望が最近出てきており、受け入れのためのスタッフの確保、指導方法の検討が急がれている。

(2) スキー協会

・事務局の負担軽減

協会の活動には事務局が必要だが、これを個人で担うのは重い負担である。公的機関の関与が必要である。

・暗眼パートナーの費用

視覚障害者自身の費用については自費が当然だが、視覚障害であるが故に必要な暗眼パートナーの費用については協力者を募集するうえでも、何らかの補助が必要と思われる。

(3) 共通

・リーダーやパートナーの養成

リーダーになるためにはスキー技術だけでなく、視覚障害に関する知識と視覚障害者スキーの経験も必要となる。しかし、養成システムもなく、経験的な養成が行われているにすぎない。パートナーの養成も同様で何らかの対策が必要である。

・安全の確保

小規模で比較的スキーヤーの少ないスキー場を選んで使用しているが、危険な場面もなくはない。現在は視覚障害と大きく書いたゼッケンをつけたり、ホイッスルを使用して、周囲の人に注意を促す等の対策をとっているが、まだ不十分である。

これらの問題は簡単に解決できる性質のものではなく、実践の中から少しずつ解決していきたい。

《参考文献》

- 1) 渡辺文治 増田良一 間嶋和子 (1990) : 神奈川における視覚障害者のスキー
ブラインドスキーの11年 : 視覚障害 1990年11月号 : 1~19
- 2) 藤田功三 白崎正彦 渡辺文治 (1995) : 神奈川における視覚障害者のスキー
―― 神奈川県視覚障害者スキー協会の10年 ―― : 第33回社会福祉研究発表大会 :
106~108
- 3) 渡辺文治 末田靖則 矢部健三 (1995) : 神奈川における視覚障害者のレクリエ
ーション (4) ―― 視覚障害者スキーの現状 ―― : 第4回視覚障害リハビリテーショ
ン研究発表大会論文集 : 132~135
- 4) 渡辺文治 白崎正彦 増田良一 間嶋和子 (1995) : 視覚障害者のスキー誘導法
: 視覚障害リハビリテーション協会紀要No. 2 : 16~22